
優しい人

maki

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい人

【Nコード】

N9929L

【作者名】

mak i

【あらすじ】

最近のモラルについて少しだけでもいいので考えてください

いづも（前書き）

実際にあった話を元に書いています

まんま原作かも（笑）

じゅも

児童相談所とは非常に大変な職場だ。通報があったら必ず『児童虐待の恐れアリ』と通報者が電話で伝えた場所を訪れなくてはならない。そのくせ、医者が診察の際に発行する診断書などといった第三者が虐待を証明する何かを虐待をしていると思われる両親に提示しなければこどもを保護することが出来ない。

つまりそれは、明らかに身体的、精神的に限界のこどもが目の前にいてもそれらがないと助けることが出来ないのだ。

私はそんな状況に何度も立ち会った、いや、立ち会ってしまった。

それでも何とかして、たくさんのこどもを保護してきた。そしてこれからも保護するだろう。

こどもは傷つき易い。こどもにとって絶対的な存在である親に傷つけられたら存在そのものが崩れさってしまう。

だからこどもは黙る。親の暴力を口に出さない。

「大好きなお父さんを、お母さんを怒らせた私が悪いんだ」

そういつて、親の肯定してはいけない虐待を肯定してしまう。その様は酷く痛々しい。

だからこそ、やれることは全てやる。使える手は全て使う。そうでもないことどもは救えない。

彼らは経験した者でなければわからないほどに、深淵の奥深くに居るのだから。

こども（後書き）

次からが本編です

人は振り回される生き物だ（前書き）

続けて言いますが事実です。

人は振り回される生き物だ

運命は残酷だ、自分が生きたいように生きれない。

それはつまり産まれてくる環境を選べないという事であり、親を選べないということなのだ。

運命は気まぐれだ、裕福な家でどうしようもなくダメな子どもが産まれることがあれば、何かと努力の才能を十二分に持ち合わせた子どもが品性のかけらもないどうしようもなくダメな親の下に産まれてくることもある。

私は高校生の時、虐待を受けた経験のある少女と友達として付き合いっていた。彼女はあるとき、『どうしてあんな親の所に産まれてしまったんだろう』と呟いた。

彼女の実の父親はヤクザだった。父親は覚醒剤クスリが入る度に暴れたため母親は彼女と彼女の姉を連れて夜逃げした。うる覚えではあるが父親は傷害で逮捕されて留置所に入ったため父親は探しに来なかったらしい。

そこから先は彼女が話したがらない、私が知っているのは今は姉と

二人で暮らしているらしいということだ。

私は『きつとコウノトリがイカレていたんだ』と言ってしまったことをいまだに後悔している。

藤沢「申し訳ありませんでした」

本日2度目の平謝り。正直言っただけ腰が限界だ。児童相談所の椅子が堅いせいでもある。

藤沢「ご近所間のトラブルをこっち持つてくるなんて迷惑極まりないです！」

職場で最も若い藤沢華が腰をさすりながら愚痴る。心なしか首も痛めているようだ。

本間「言っときますけど藤沢さん、今日のなんかマシな方よ」

藤沢より6年先輩の本間由岐が言っていると、数少ない男性職員である佐川将が口を挟んできた。

佐川「そうそう、前なんか『ウチの息子が苛められてるっ！』って電話で怒鳴り込んできた母親がいてね」

長田「とりあえず自宅に伺ったら母親はヒステリック状態でまるで話にならなくてね、息子の方に話を聞いたら友達とケンカしただけらしくね、ケガもほとんどしてなかったわ」

一番の古株である長田恵美が気怠そうにまとめた。いったい何歳な

んだろうと藤沢は思っている。

藤沢「へえ、実際にいるんですね、そんな母親って」

本間「ええ……、本当はその後にいろいろあったんだけどね……ボソッ」

バツチリ聞こえていたが、あんまり聞かない方が良いと判断したので聞かなかったことにした。

長田「ええ、まあそれが普通の方ね」

藤沢「普通、ですか……」

佐川「最近のモラルの低下はすさまじいですからね、大人になって
もいまだに自分が一番偉いと思っている人が多くて困りものなんだ
よ」

もつともだと藤沢は思った。今日2度目の平謝りの原因は仲が悪い
主婦同士が起こしたイザコザのようなものだったし。まあ、最終的
には長田さんの一括が主婦二人を黙らせたのだが。

長田「もつと酷い事例なんか山ほどあるわ……」

長田が自嘲気味に笑いながら言うのと相談所の空気そのものが重くな
った。

藤沢「？なんだか話しづらそうですけども……」

本間「話しづらいことなのよ」

思い出したくなかったことを思い出されたかのように本間が明ら
かに不機嫌になる。

長田「佐川君、とりあえず新人にこの仕事の本当の厳しさを教え込
みたいからあなたの水口苦い実体験を喋ったしまっても良いかしら
？」

佐川「どうせ我慢できずに喋っちゃうはずですから構いませんよ」
長田「藤沢さん、あなたはどんなの？」

長田がこちらを向いて尋ねる。その表情もどこか自嘲気味で藤沢はよくこの長田の表情を見ていた。

この顔は、長田が心の底から忌々しいと思っているときの顔だ。

理不尽な連中から理不尽な文句を言われていた時もこの顔をしていた。

藤沢「いや、選択肢なんか1つしかないでしょうが！」

本間・佐川・長田「??????」

つい大きな声で一人ツツコミをした後で発生した変な空気が収まった後、勇気を振り絞ってはっきり言った。

藤沢「聞かせてください」

長田「……………ニヤリ」

藤沢「……………ええ」

佐川が小さい声で失望タ～イムと言っているのが聞こえたが突っ込む余裕すらなかった。

人は振り回される生き物だ（後書き）

藤沢華〓一応主人公。児童相談所に勤め始めて半年未満という設定。友達の話はまた別に書こうと思っています。

本間由岐〓下の名前はゆきと読みます。苦勞人。

佐川将〓しようと読みます。勤続2年目で年齢も藤沢と近い。ちょっとだけお調子者

長田恵美〓年長者。経験豊富。長老的ポジションで扱いたい。

現実（前書き）

個人的な話：中日ドラゴンズを応援してるんですが、入団当初からずっと期待していた堂上直倫さん（どのうえなおみち）：入団4年目が長い苦年の日々を乗り越えてプロ入り初ホームランを打ちました。

なんだか嬉しくなつてここに書き込もうと思つて、漢字変換で直倫「なおみち」ができなかったので、wikipediaで調べたら、

「6月27日の広島戦でプロ入り初ホームランを放つ」

つてもうかいてありました・・・・・・・・。。まだ数分しかたつてなかったというのに・・・・・・・・。。

現実

数年前のことである。佐川と長田は『虐待の恐れアリ』と近隣の住民が通報してきた家に訪れた。

出てきた親子は明らかに典型的状態の親子だった。こどもの目は空虚で死んだ魚のような目をしていて、両親は若く、いかにもといったような夫婦だった。

そして対応も月並みだった。躰ですから、こちらの問題ですので、月並みの言葉を並べられた。

児童相談所の掟は基本的に疑わしきは罰せずというスタンスで、躰といわれて入室を断られると職員が踏み込めるのはそこまでののだ。親の一言で緊急性が無いと判断せざるを得ない。佐川と長田も例に漏れずそのまま帰らざるを得なかったのだ。

その翌日、その家のこどもが死んだ。長時間の暴行に加え、極度の衰弱が直接的な死因だったらしい。

佐川は呆然となった。初めて訪問した家で虐待が行われている事実に気づいていたのにも関わらず、何も出来ず、何もしなかった自分に落胆した。

個人の問題で済めばそれで良かった、問題はどんどん大事になったのだ。

こどもに度重なる虐待を行っていた夫婦はあろう事か虐待を止める

ことが出来なかったのは周りが止めなかったからだと供述したのだ。

最初こそは教養のない馬鹿が何かわめいているのだと日本全国が思っていたのだが、児童相談所の職員が一度だけ訪問していたという事実を知ると、マスコミは糞尿にたかる蠅のように集り始めた。

状況を知りながら一切の行動をとろうとしなかった、職務怠慢、注意等も行わず夫婦の怒りを煽っただけ

世論は一瞬で組み変わる、己の未熟さ故にこどもを殺さざるを得なかった哀れで無知な夫婦には全国から無知な同情が寄せられ、児童相談所には愚かな夫婦に寄せられていた以上の苦情や日々の鬱積した何の関係もない不満が押し寄せてきた。

日々鳴り止まない電話、無意味に投げつけられる石や紙屑、それらの全てが職員の心の中に重くのしかかっていった。

今残っている職員はその時に辞めずにいた職員達なのだ。

2ヶ月が過ぎて、どうしようもなく理不尽な時間を過ごしてきた職員達は疲れ切り、心身ともに憔悴しきっていた。それでも辞めなかったのはいろんな事に対する怒りを抱いていたからだろう。

世の中は弱者に優しすぎて、愚者に甘くて、それを諫める者には厳しい。

バカバカしくって、こんなどうしようもないことに職を失うなんて馬鹿のことだとみんながみんな思っていた。

藤代「あ……………この仕事に失望しそうです……………」

絶叫がとても良く響き渡った。

現実（後書き）

割といいかげんな・・・・・・3話でこんなですが終盤はとてつもなくシリアスになっています

死んだ目（前書き）

久々に更新します。

死んだ目

翌日、様子見のお願いの電話きた。昼夜問わず夫婦が子どもを罵倒する声が聞こえるらしい。

長田「・・・・・・・・・・よりによって子供夫婦（若い男女で構成されている夫婦）のデキ婚らしいわよ」

藤沢「子供夫婦ですか・・・・・・・・・・ここ最近増えてませんか？若い夫婦の虐待とか」

長田「なんていうのか、最近の一般モラルの低下は凄まじいから」

藤沢「それだけで済ませていいんですか？」

長田「済まない場合があつた事故だよ。産んだ当初の母性つてのは案外すぐ消えちゃうモンだからね、子どもを守るべき存在から邪魔な存在に格下げちゃうんだよ」

藤沢「・・・・・・・・・・最悪の状況つてヤツですか」

長田「何はともあれ、話を聞かないことには始まらないよ。さつ、ドアを叩け」

藤沢「なんと言つものか・・・・・・・・・・」

コンコン、とドアを叩く。

藤沢「すいませーん、児童相談所の者ですがー」
男「アイー」

どこか鼻の詰まった様な声が玄関先に響く。ドアが開くといかにもチャラついた容姿の男が現れた。

男「児童相談所がなんのご用ですかあ？」

藤沢「……………」

何というか、間の抜けた声だった。馬鹿丸出しとはこのような時に言う言葉だろう。

長田「近隣の住民からこの家は虐待が行われていると思われるにいます」

男「はあ？なんでそんな言いがかり付けられなきゃなんねーんスカ？」

長田「そうは言われましても、火のない所に煙は立たないといいますからね」

男「ああ？何スカ、ケンカ売ってんスカ？」

長田「あくまで可能性の話ですよ、こどもさんの様子を見て虐待されている様子がなかったら私たちが自ら近隣の住民の方々に言っただけでもいいです」

男「……………チッ」

男は不機嫌な感情を隠そうともせず舌打ちをする。

男「諒お、お前に客だぞお、早く来い！」

明らかにぞんざいな扱いを受けていることにも対する声だった。

藤沢華に過去の事例の話を聞いた時以上の衝撃が走る。

なんなんだ、この子は、

目が死んでいる。

その少年と目があつた瞬間、心の奥底まで見えた気がした。

その少年の目は無言で語っていた。

『
関
わ
る
な
』

救いの手（前書き）

これで終わります

救いの手

山尾諒は9歳の小学4年生だ。両親から詳しい話はほとんど聞けなかった（というよりも話す気ナシ。もうふて腐れまくっていて意思疎通するつもりがないみたいだった）。

しょうがないので山尾諒の通っている小学校に話を聞きに行った。すると案の定というのか、お決まりのパターンな言葉が返ってきた。

先生「諒君はイジメられているようなんです……………」

長田「はあ、主にどのような要因ですか？」

先生「……………諒君のお家の状況がどのようなものか存じているでしょうか？」

長田「はい、児童相談所に連絡が来てから一度しか行ってはおりませんが」

それなら話が早いと言わんばかりに先生はまくし立てた。

先生「あの子の両親は非常に所得が低くてですね、生活保護を受けているようなのですが、その手当のほとんどをパチンコに使ってしまつらしいんです。諒君は両親がほとんど留守番させるだけの生活を送らせているためか洋服の洗濯も満足にされてないようで……………それがイジメの原因になっていゐるんです。それに食事も与えられていないのか給食をとて大量に食べるんです。そのせいで『ブ

タツ！』と罵られている所も何度か目撃してはいます」

藤沢「……………先生は気にならなかったんですか？」

先生「気になりましたよ。だから……………山尾さんのお宅を訪問もしました。けど……………」

長田「躰だと」

先生「ハイ……………」

長田「それではやはり埒があきませんね……………」

先生「何度か知り合いの、こういった状況の対処に詳しい方に相談に乗ってもらえたんですけど……………緊急性がないと対処しかねると……………」

長田「……………諒君は保健室のお世話になることが多い子ですか？」

先生「……………？今調べますので少々……………」

先生が出席簿を探しに来客室を出ると藤沢が長田に疑問を投げかけた。

藤沢「保健室に頻繁に行っているかなんて何かの証拠になるんですか？」

その問いに対して長田は不敵に笑うだけだった。

先生「持ってきました」

先生が急ぎ足で来客室に入ってくる。

長田「まあ見てなさいよ。領分をわきまえないガキには経験豊富なお姉さんがお灸を据えてやるわ」

藤沢「もうそろそろ34になりましたよね？」

翌日、見事に保健室に諒君を引き入れることに成功。

～前日～

先生「……………一度も来ていませんね」

長田「・・・分りました」

藤沢「何が分かったんですか？」

長田「先生、一つお願いがあるんですが」

藤沢「蚊帳の外とはこういう状況のことか・・・」

〽日にちを戻して翌日〽

長田「見事なお手並みでした」

先生「いえ、教師の立場を悪用したことが心が痛いだけですから」

藤沢「・・・」

長田「拗ねるなよ、何も分からないアンタに知らせたらかえって危険でしょ？」

藤沢「要するに服を脱がせて服の下に傷があるかどうかを確認したかったんでしょ？それくらいだったら・・・」

長田「慎重になりすぎて悪いことはないさ。ともかく」

藤沢「緊急性の裏付けは取れましたからね」

山尾諒の体は酷い状況だった。打撲の痕跡やタバコを押しつけられた跡が至るところについており、それを趣味の悪いタトゥーのようだと長田に漏らした。

長田「こどもの前では絶対に言うなよ……………」

藤沢「顔の怖さが尋常じゃないことになってますよ……………」

長田「何とでも言え……………」

医師「すみません、三人ともちょっとよろしいでしょうか……………」

医師の先生は山尾諒の手を取って三人に見せた。

医師「この子の指を見てください」

医師の先生に差し出された手を見ると指の形が歪になっていた。

藤沢「・・・・・・・・・・！」

長田「・・・・・・・・・・これはどういうことなんです？」

先生「・・・・・・・・・・」

医師「おそらく暴行を受けたのでしょうか。指が骨折したのを放っておくとこのような形になってくつついてしまう事があるんです」

先生「でも・・・・・・・・・・でも指が折れるなんて・・・・・・・・・・」

医師「普通なら大人でも放置していたら叫び苦しんで発狂する可能性もありますよ・・・・・・・・・・」

諒「・・・・・・・・・・よ」

先生「・・・・・・・・・・諒君？」

諒「・・・・・・・・・・ぶたれるんだよ」

藤沢「・・・・・・・・・・お父さんとお母さんが何をしたらぶつの？」

諒「うるさくしたらまたぶたれるんだよ……」

言葉を失ってしまった。

長田の目に恐ろしい映像が浮かぶ。指が折れて泣き叫ぶこどもを苛立ちを隠そうともせず踏みつけ、殴りつける父親、助けを求めてすがりつく我が子を汚物をも扱うような手振りで払い、それでも助けを懇願する息子の体にタバコを押しつける母親。

誰も味方がいない状況で、この子は泣かないこどもになってしまった、泣かないこどもにされてしまったのだろう。

藤沢「こんなの駄なんかないですよ……」

長田「ああ……」

藤沢「医師（先生）！診断書をお願いします」

こどもの未来はこどもの物だ。

間違っても大人の物ではない。

長田「……………気をつけなきゃダメよ」

藤沢「暑くなりすぎました……………」

再び訪れた子供夫婦の家。相変わらず間の抜けた父親は「ああ？」とかばかり言っていた。

父親「だからあ、躑だって言ってるでしょ？コイツは明らかに劣っているから他より厳しく躑けないと他の家の子供と並べねえの」

藤沢「……………」

明らかに劣っているのはお前の方だケツの穴ほじくり返すぞと言いたいところだが息を思いつき飲み込んで我慢した。暴力をふるったらその瞬間終わりだ。

医師「そうは言われましてもね、あなた達両親の躑は虐待の領域に入っているんですよ」

医師（先生）ができるだけ優しく言ったのにも関わらず、脳天パー男の堪忍袋の緒は予想を上回ってあっさりとキレた。

父親「だからあゝ、駄目だって言ってるだろうがよお！」

脳天パー男は自分の息子の腕を強引に引っ張るとそのままくわえていたタバコの火を諒の腕に押しつけた。

先生「ひっ……………」

長田「……………」

医師（先生）「あっ、あんたなにやってるんだ!？」

藤沢「諒君!」

諒はそんな行為にも一切表情を変えなかった。まるで華の叫びが届いていないようだった。

男「わかった？コイツは出来損ないなの だから人並みになれるように躑けてやってんだよ！！」

ヒヤヒヤヒヤヒヤ、と下卑た笑いが響く。みんなが表情をゆがめて絶句する中、華だけが諒の表情を見ていた。

全く表情を変えなかった諒の唇が、微かながらに震えていた。

考えるよりも先に体が動いていた。華はゲスの手からタバコを奪い取ると、

男「あっ？」

そのまま男の腕をつかみタバコを押しつけた。

男「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！うわあ
あああああ！！ अच्छیییییییییی！！」

藤沢「当たり前よ！熱いに決まっているじゃない！諒君だって熱いのよ！人間なのよ！殴られたら痛いし火傷したら熱いのよ！諒君は人間よ！そんなにひどいことしないで！」

長田「ヒヤッとした」

藤沢「お世話かけました・・・」

長田「それ以上謝らなくていいよ、言いたい事全部言われたしね」

あの後、錯乱して暴れだした男と一緒に来ていた警察官に取り抑えてもらい、精神疾患の可能性があるとして病院に送られた。二人は仕事から帰ってくる母親を待っているのだ。

長田「・・・・・・・・ヒマだな」

藤沢「緊張するなとまでは言いませんが・・・・・・・・」

長田は思い付いた様に藤沢に耳打ちした。

長田「華、お前ちよつと諒君と話せ」

藤沢「！？何を話せていうんですかつ！？」

長田「あんなに大立ち回りがましたんだ、諒君はお前には少しくらいなら心を開いているかもしれんぞ」

藤沢「でも！父親がひつたてられても表情一つ変えないんですよ！
？無理ですつて！」

長田「大丈夫だ、お前こども受けはいいだろ」

ドンツ、と畳に転がされる華、いつてゝ、とか言いながら起き上がると諒と目が合った。おのれ四十路め。

藤沢「・・・・・・・・諒君、ちよつと良いかな？」

諒「・・・・・・・・」コクリ

藤沢「・・・・・・・・タバコ、熱くないの？」

我ながらバカな質問だ。あんな事言つた直後に何を言ってるんだろ
う。

諒「・・・・・・・・殴られるんだ」

藤沢「・・・・・・・・？」

諒「痛いって言つたらお父さんは『静かにしろっ！』って言って殴
るんだ・・・・・・・・」

藤沢「・・・・・・・・泣かなかつたの？」

諒「泣いたらまた怒られるよ・・・・・・・・」

藤沢「・・・・・・・・」

諒「・・・・・・・・えっ、」

諒の視界を華の胸が覆っていた。

藤沢「大丈夫、これで泣いても誰にもバレないから」

「私が諒君を守る壁になるから、存分に泣きなさい」

諒「ううう、うわああああああん！……痛いよー、熱いよー、辛いよー！……！」

「誰か、誰でもいいから、僕を助けてよー！……！」

世の中には生まれ落ちる場所を間違えたこともたくさんいる。

それを一人でもいい、救い出したい、それだけで私は動ける。

あなたの隣に、困っている人はいませんか？

もしいるのなら、助けてあげてください。

窮地から助け出してください。

その人を地獄から助け出せるのは、あなただけかもしれないのだから

救いの手（後書き）

実際にあった話です。これを機に考え直す事になるかも・・・

感想待ってます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9929/>

優しい人

2010年10月20日15時17分発行